

九州大学工学部卒業後、重工業メーカーを経て、平成15年関係会社退社

「62歳からの旅立ち」

私は、平成18年の12月を迎えると65歳となる。62歳になったとき37年余りの会社勤めからリタイアした。私の人生の転機でもあった。

リタイアして暫くの間は一日の時間の全てを自分のためだけに使える夢のような“毎日が日曜日”で過ごした。しかし、かみさんと朝から晩まで顔を合わせていると会社勤めのときには隠れていたお互いの人生観、価値観が衝突し、些細なことでも口喧嘩が絶えなくなった。

見合いで結婚した6歳年下のかみさんは、気性が強く、多分に自己中心的である上に50歳近くなつてからは更年期のイライラが募り、キレると大声で喚きだす。そういう時は暴風が過ぎ去るのをジッと我慢するようになっていった。

かみさんに説教めいたことを言えば必ず拒否的な反応しか返ってこない。今更かみさんも私も気性までは変えることは出来ないであろう。このまま同じ心の持ち方では二人の関係は破綻していくと思われた。

私としては想定外のリタイア生活に突入して三ヶ月ほど経った62歳の春に、予てから関心を持っていた四国遍路の歩き旅に出た。62歳からの旅立ちである。

長い間家を留守にすることにかみさんは反対しなかった。彼女も私との距離をおいてひとりになりたかったのかも知れない。

春のうららかな陽を浴び、野辺の菜の花を眺めながら空海も歩いたという遍路道を歩くことは、それだけで夢のような至福のと

きであった。何も考えないで歩くことにした。歩きながら湧き上がってくる想い、感慨は湧き上がってくるに任せた。突然、幼少の頃や何十年も前の情景が鮮明に甦ってくる。

長兄が亡くなったとき、その死に顔が父の死に顔にあまりにもそっくりで驚倒したことなどをありありと思い出していた。自分の体内には36億年前からの祖先のDNAが流れているのだ、千年前の祖先はどこでどんな暮らしをしていたのだろうか、など想いながら歩いていた。

愛媛の大洲の町を歩いていたとき、80歳くらいのお婆さんが10円玉をお接待してくれた。それまで食べ物や100円玉、500円玉のお接待を受けてきたが10円玉は初めてであった。

数日後、歩いているときに10円玉をくれたお婆さんのことが浮かんできて、アッと思った。あのときお婆さんは、たまたま10円玉をお接待してくれたのだ、と私は勝手に思い込んでいた。あのお婆さんは、あの町のあの通りで今日も何人ものお遍路さんに10円玉をお接待しているのだ、しかも毎日毎日、何年も何十年もあのようにしてお接待をしてきたのだ、という想いに至ったとき、涙がとどめなく流れ出してきた。

人の表面しか見てこなかった浅はかな懺悔の涙だが、法悦の涙でもあった。それ以来、何かをきっかけにして涙が溢れ出してくることが何度もあった。

毎日歩き続けて気が付いてきたことは、食べることの心配もなく、フトンで寝ることができて、自分の足で歩くことができれば、それだけで十分に幸せなのだ、ということであった。

49日振りに帰宅するとかみさんは笑顔で迎えてくれた。しかし、数週間もすると元の元気すぎるかみさんになっていた。

遍路から一年半後、かみさんは私の反対を押し切って中型犬を

家の中で飼い始めた。その半年後、かみさんは犬と散歩中に転んで足を骨折した。それ以来、毎日犬の散歩は私の役目となった。

かみさんの口からは相変わらず批判、不満、自慢と噂話しか出てこないが、今日も食事を作ってくれたし、洗濯もしてくれた。かみさんの小言もヒステリーもこれは彼女が元気に生きている証拠だ、と思うことにした。

若い頃のラブも愛だが、老いて相手を受け容れようと我慢することも愛である、と思うようになってきた。